

水野信元を助け「村木砦の戦い」を征し

桶狭間で今川軍に勝利した織田信長

郷土の生んだ三英傑の一人、織田信長は父の亡き後織田家をまとめ、後には天下をとる寸前で、明智光秀の謀反にあい生涯を終えた。

うつけ者と言われながら村木砦の戦いに勝ち、織田家における地位を確かなものにしたといわれる。そして、わずか2,000の兵で桶狭間において今川義元の本隊5,000を打ち破った。今回の講座は信長が清洲城を出て、熱田神宮に立ち寄り戦勝祈願をして、桶狭間でどのように戦ったのか・・・・・・・・

これらについていつものように津田先生の講義を聞き、清須、熱田、桶狭間の現地を訪れた。講義の内容は織田信長に仕えた太田牛一の記した「信長公記(しんちょうこうき)」に元づくもので、その記述は信長の実績を淡々とまとめており、筆者の論評や分析は見当たらない為、信頼性が高いとされる。ちなみに彼は信長の死後は秀吉に仕え、秀吉や家康の軍記なども手がけた。

いただいた資料その他から、私なりに信長の生まれたころから桶狭間の戦いまでを、整理し直してみました。

1 織田信長の生まれた頃の尾張

室町時代の初め 1451(宝徳3)年の頃の尾張は斯波(しば)義重氏が守護職を務め、清洲に守護所下津城(現稲沢)の別郭として清洲城を築きました。斯波氏は室町幕府を支える三管領(斯波、細川、畠山)の家柄で、将軍家に次ぐ有力な守護大名でした。足利家の血筋を引き、越前から遠江までを支配していました。統治組織としては、守護の下に守護代、その下に守護又代が置かれていました。

守護代の織田氏は、織田伊勢守常松と織田大和守常竹が対立し、尾張8郡を手に入れようと争っていた。その後、織田伊勢守常松が尾張上4郡、織田大和守常竹が尾張下4郡を分け合って支配することで、和議が成立しました。1516(永正13)年、織田大和守達勝の3奉行は織田因幡守、織田藤左衛門、織

田信定といわれる武将でした。このうち織田信定の子が織田信秀で、織田信長の父です、彼は3奉行の一人でしかなかったが、優れた智勇を持って尾張中西部に支配権を拡大していった。

1534(天文3)年津島の勝幡城で、織田信秀に嫡子織田信長が誕生しました。母は土田御前で幼名は吉法師です、彼は13歳の時古渡城で元服して織田三郎信長と名を改めました。織田信長の本家は織田大和守達勝で、達勝の分家という立場になります。

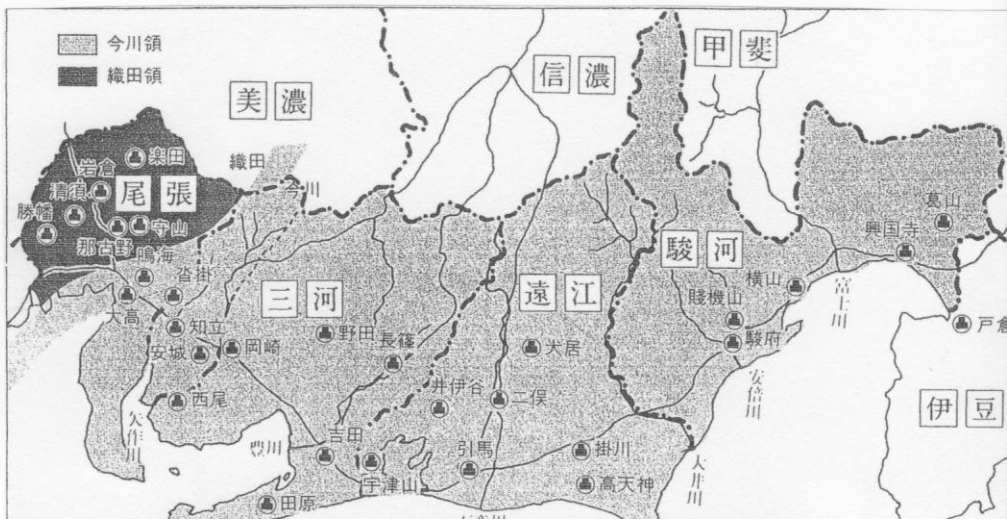
2 織田家の家督争いを勝ち抜いた信長

1546(天文15)年織田信長は13歳の時古渡城で元服、父信秀は末森城を築城。翌年、織田信秀は美濃の斉藤道三と戦い大敗しました。これを見た織田本家の織田大和守信友は守護の斯波義統を清洲城に招き、斉藤道三とも連絡を取って信秀を滅ぼそうと画策します。同じ1547(天文16)年信長は14歳で初陣、港のある三河大浜城を攻略します。しかし、代々織田家に仕えてきた鳴海城主山口教継は織田信長を見限って、今川氏に寝返りました。

1548(天文17)年末森城に移った信秀は、信友の画策を封ずる為に斉藤道三と講和し、その娘濃姫を信長の室に迎えます。

今川軍安祥城を攻略する

1549(天文18)年今川義元は三河安祥城を攻撃しました。安祥城は松平家の城でしたが、織田家が奪い信長の兄信広が守護していました。今川軍は安祥城を攻略し織田信広を生け捕り、熱田に人質となっていた松平竹千代との人質交換を要求し、織田信秀はこれを受け入れます。これにより今川義元は西三河から織田氏の勢力を駆逐し、駿河・遠江とあわせて92万石の大領主になりました。



駿河、遠江、三河を支配した今川義元

父信秀の死と尾張南部を失う

1550(天文 20)年織田信秀は、末森城を織田信行(信長の弟)に与え自分の後継者にと考えていました。1551(天文 21)年 1 月、織田信長は前田犬千代(後の前田利家)ら 8 人だけで、織田本家信友のいる清洲城に火をかけて引き上げました。これに対して家臣たちは織田本家の反撃を恐れ、信行を後継者にするように織田信秀に嘆願します。この混乱を利用して犬山城の織田信清が末森城を攻めました、その最中に織田信秀は卒中で亡くなります。時に 42 歳でした。3 月、織田信秀の葬儀は万松寺で行われましたが、焼香の時間になっても織田信長は現われません。やむなく弟を先に焼香させようとした時、体裁も整えず馬に乗ってやってきた信長は、香をつかむと「喝」と叫んで位牌に投げつけそのまま帰ってしまったといいます。

1551(天文 21)年信長は 19 歳で父信秀のあとを継ぎます。1553(天文 22)年織田信長は末森城を弟信行に譲り、自分は古渡城に移りました。そして、1553(天文 22)年信長は鳴海城を奪回しようとしたのですが、逆に敗れました。鳴海城主山口教継は、勢いによって大高城と沓掛城を攻略しました。これにより織田信長は尾張南郡を失います。しかし、鳴海城主山口教継は謀反の計画ありという噂を信じた今川義元に切腹させられます。

織田信長「村木砦の戦」で初めて鉄砲を使う

1554(天文 23)年 1 月 21 日、緒川城主水野信元の要請を受けて村木砦攻撃のため那古野城を出発。22 日は強風の中、熱田から舟を出して 23 日に緒川城に到着。24 日朝から織田・水野連合軍 1300 は三方から攻撃を開始。三河の武将松平甚太郎が守る村木砦に対して、信長はこの時初めて鉄砲を使用した。家来に玉込めさせた何丁かの鉄砲を信長自身が次々に発射したという。夕方になって今川軍はついに降伏した。信長がこの戦に勝利したことにより、織田一族における信長の立場はこれまでの「うつけ者」から見直されることになったようです。

1559(永禄 2)年 織田信長は尾張を統一する

1555(弘治元)年信長は、守山城主織田信光(信長の叔父)を追放し、織田信光の弟信次に与えました。他方、清洲城主の織田信友は信長の弟の末森城主である織田信行、さらに、信長に追放された元守山城主(この時にどこにいたか)織田信光と連携し反織田信長戦線は拡大するばかりでした。そんな中で織田信長は、今川義元に攻められている緒川の水野下野守信元の援軍と称して、自分の身代わりに織田信次を出陣させます。これに呼応して織田信友は清洲城を出て、保護している織田信光の屋敷を訪れましたが殺害されます。信長は自ら留守になった清洲城を攻略し入場しました。これは信長の策略でこの結果、織田信光には那古野城を与えて、叔父追放に成功します。

1556 年反信長派だった柴田勝家は、信長の偉大さを知り、信長の母(土田御前)を先導にして、信行と重臣を連れて、清洲城の信長にわびを入れました。一方、信行はその後も信長の暗殺を企てますが逆に信長の刃に倒れます。

信長は鳴海城奪回のため付城を築く

1559(永禄 2)年信長は、岩倉城の織田信賢を攻め滅ぼします。この結果長く続いた織田家の内紛も終り、尾張は織田信長の手によって統一されました。

そして今川に対抗する為織田信長は、鳴海城付近に丹下砦、善照寺砦、中嶋砦、丸根砦、鷲津砦の5砦を設けて、鳴海城と大高城を分断する作戦を取ります。特に丸根砦は沓掛城から大高城に通ずる位置にあり、鷲津砦は鳴海城と大高城を見下ろす位置にあつて重要な役割をもっていました。



大高城には鷲津砦と丸根砦 鳴海城には丹下砦、善照寺砦、中嶋砦を築く

3 信長はいかにして桶狭間で勝利したか

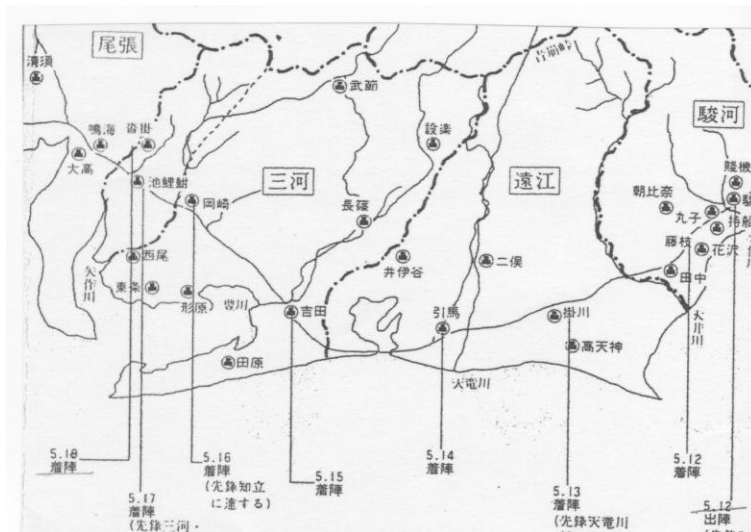
1560(永禄3)年5月12日、今川義元(45歳)は2万の兵を率いて駿府を出陣しました。迎え撃つ織田信長軍は5000です、今川義元の1/4の兵力しかありません。いったいどのように戦ったのでしょうか。

① 桶狭間付近の両軍の拠点

桶狭間は、尾張において今川氏勢力と織田氏勢力がせめぎ合う地域であった。鳴海城、大高城はともに元は織田方の城であったが、大高城の山口左馬之助が今川に寝返って、以降この時点では今川方の尾張攻略の橋頭堡となっていた。これに対して、織田方は今川勢力の尾張攻勢を押しとどめるべく、付城(敵城の近くに築いた城)を配した。1559(永禄2)年に大高城監視のために、

鷲津砦、丸根砦を築いた。鳴海城に対しては、当時背後に入海を控えた要害の地に築かれた城で、これを封じ込めるため丹下砦、善照寺砦、中嶋砦の三砦による包囲網を敷いた。

② 今川義元の進軍は



義元の進軍行程

1560年(永禄3)5月12日、今川義元(45歳)は20,000の兵を率いて、駿府を出陣しました。掛川へ13日、14日引馬、15日吉田、16日岡崎に着陣し17日には池鯉鮒に着陣します。ここまでは人間が歩く普通の速さで、まさに威風堂々と義元は尾張に侵攻したのです。そして、18日沓掛城に着陣します。

③ 5月18日夜 信長の決断は

5月16日今川義元は岡崎城に入ります、18日に沓掛城へ入った今川義元は軍議を開き「19日早朝、松平元康率いる1200人は丸根砦を攻撃すること。朝比奈泰朝の2000人は、鷲津砦を攻撃すること。義元は本隊を率いて出撃する」ということを決定しました。

一方、丸根砦は佐久間大学盛重ら700人、鷲津砦は織田信平ら400人が守護していました。

18日の夜、今川義元が沓掛城に入ったという知らせが、清洲城の織田信長に伝えられました。そこで織田信長は軍議を開きました。

柴田勝家ら重臣は、定石どおり「大軍を相手にするには、籠城しかない」と主張しました。しかし、織田信長は「城を出て戦う」ことを主張しました。(信長公記では、その夜軍議は開かれず織田信長は重臣らと雑談を交わし、夜半、諸将を帰らせたとあります)

19日「今川軍動く」の報に接した織田信長は、幸若舞の「敦盛」の謡の一節である「人間50年、下天の内を比ぶれば、夢幻のごとくなり、一度生を受け、滅せぬ者のあるべきか」を謡いながら、三度舞ったといひます。舞い終わると、ほら貝を吹かせて全軍に出撃を命じ、具足をつけると立ったまま茶漬けを流し込んで、馬に乗って駆け出しました。

④ 午前8時頃熱田神宮に集結

5月19日午前8時頃、2,000人ほどが熱田神宮に集結しました。織田信長が願文を読み上げた時、神殿の奥深くで甲冑の触れ合う音がして、一羽の白鷺が悠然と舞い上がりました。信長や兵たちは勝どきを上げ、勝利を確信しました。信長は前田犬千代に300の兵を与え、本隊の行動を隠すおとり部隊として、鳴海方面に出動させました。そして、信長自身は2,000弱の兵を従えて社を出て、東海道ではなく「かみ道(鎌倉道)」を通過して丹下砦へ向かいます。途中で鷲津・丸根の両砦は陥落し、佐久間大学盛重の戦死が伝えられ、信長軍にとって戦いは極めて緊迫したものとなっていました。

⑤ 善照寺砦に到着した信長のとった作戦は

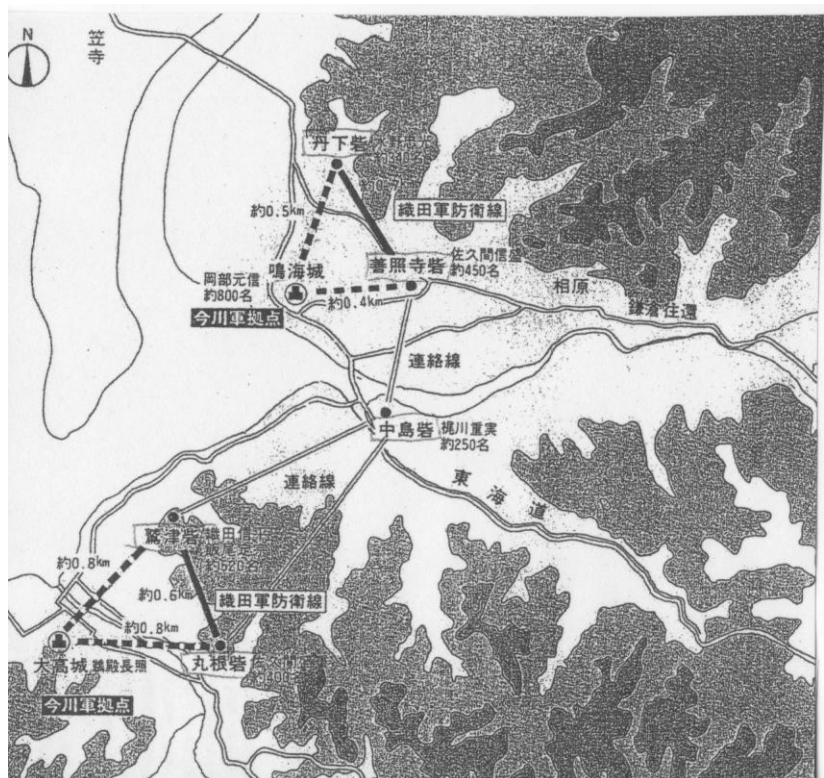
信長軍は19日午前10時ころ善照寺砦に到着、この時兵力は3,000になっていました。ここで信長は、忍びの者から沓掛城を出て西の大高城へ向かって移動する今川義元の本体が、何故か少し南の桶狭間の方にむきを変え、その途中の田楽狭間で小休止している、との情報を伝えられます。同時に、前田犬千代らのおとり部隊が、鳴海城で敗北したという情報が伝えられます。この二つの情報を得た信長は、善照寺砦を出て中島砦に移ろうとしました。これに対し柴田勝家らの重臣は必死に止めたといひます。というのも中島砦

は北に鳴海城・善照寺砦、南西の位置に丸根砦・鷲津砦と大高城があり、周囲は敵に囲まれた中にありました。あまりの無謀さに重臣たちは命を架けて信長を遮りました、すると、信長は「小軍にして大敵を恐れるなかれ、運は天にあり。戦に勝てば家も面目、末代までの高名。ただ励むべし」と説き勝家たちはその気概に打たれたといえます。

こうして信長は、善照寺砦の西にある鳴海城攻めに佐々木政次ら約 300 名を派遣し、本体を約 2.000 名として中島砦へ向かった。

⑥ 大高城をめざした今川義元は.

今川義元は、連戦連勝の報告に上機嫌だったといえます。沓掛城を出発した今川軍は 20.000 の大軍を四つの部隊に分けて、本体約 5.000 名は東海道から大高道に入り、松平元康が守る大高城へと歩を進めた。

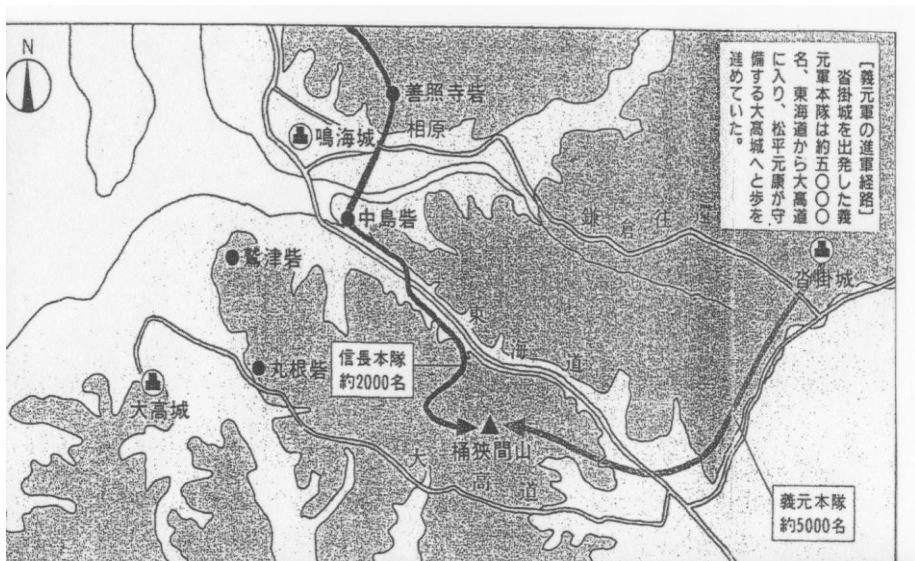


桶狭間の城と砦

しかし、大高道から直接大高城に向かうのではなく、信長軍の本拠地は避けて途中から中嶋砦・鳴海城方面へ向かった。桶狭間(正式には田楽狭間)はくぼ地なので、大軍が通過するには、縦隊になってしまいます。正午に今川義元はここで昼食をとることにしました。そこへ村の百姓たちが酒や肴を持参しました。「村の者も信長を見限った」と義元は気も緩み部下たちにもこの祝い酒をふるまったといえます。

⑦ 情報を重視した信長の奇襲作戦が成功する

織田信長が、中嶋砦と桶狭間の中間点である相原に着いた時、梁田政綱から「今川軍の本体は、桶狭間で昼食をとっている」という重要な情報がもたらされます。すかさず行動を起こした信長は、旗指物などは打ち捨て田楽狭間の北方にある太子ヶ嶺にたどりつきます。この時、義元は警護の兵を配置していましたが、激しい雷雨があり織田軍の行動を助けました。



信長軍と義元軍の進軍経路

午後2時頃雨が小止みになると、信長は攻撃命令を出し全軍が今川義元の本陣めがけて襲い掛かりました。不意を衝かれた今川軍は大混乱に陥りました。その中で、服部小平太は今川義元を探しだし、槍で義元の左わき腹を突

き刺しました。さらに、毛利新介が体ごとぶつかって、義元の首を掻き切りました。大将を討ち取られた今川軍は、わずか 2.000 の信長軍の前に散り散りになり敗退したのです。

信長は戦の後、論功報償を行っています。当時の基準からすれば一番槍の服部小平太を第一とすべきですが、実際は梁田政綱に 3.000 貫文以上の土地と沓掛城を与えています。このことは信長がいかに情報戦を重視していたかということになりますが、実際は不明の点が多くありますので、断言することはできません。

参考 清洲市とは平成 17 年に清洲町・新川町・西枇杷島町が対等合併し、新市名を清洲町と同じ発音ながら一字違いの「清須市」としました。歴史的には「清須」は「清洲」より古く長く使われてきた地名であり、その範囲も広がった。どちらかという江戸時代前半までは「清須」が、それ以降は「清洲」が多く、明治 13 年に「清洲村」、同 22 年に「清洲町」に一本化されてきました。